関西大学哲学会　2022.7.16

［個人研究発表］

「哲学」としての風土学

木岡 伸夫（本学名誉教授）

発表者の研究する風土学は、いかなる意味の哲学なのか。この発問に答えるべく、哲学に三義––①philosophyつまり西洋哲学、②近代（明治以後）日本の「哲学」、③普通名詞としての（万人に開かれた）哲学––を区別する。まず、カッコ付の②「哲学」を①③から区別する理由を述べ、そのうえで風土学が、③の前提に立つ②である理由を明らかにする。以下、「１　「哲学」とは何か」「2　なぜ風土学なのか」を順に論じる。

１　「哲学」とは何か

三つの意味を区別するきっかけとなったのは、野田又夫『哲学の三つの伝統』（岩波文庫、2013年）。ここには、哲学が西洋世界の専売特許ではなく、独立した古代文明の中心地域––地中海世界（ギリシア）、インド世界、中国世界––にそれぞれの伝統をもつことが示されている。哲学に「三つの伝統」があるという事実は、三つの異なる哲学が存在するといった話ではない。哲学は根本的に一つである––「世界と人生の意味についての理性的反省」（同書46頁）として。このことが、①②③の区別を立てるに当たっての大前提である。

古代以来の三つの伝統は、今日まで続くものの、西洋発のphilosophyが全世界を席巻している事実は疑えない。「哲学」という言葉から、誰もが連想するのは、西洋哲学。その事実を裏づけるように、明治維新以後、「脱亜入欧」を掲げる日本は、西洋文明から他の文物とともに、その根幹にあるphilosophyを導入して、近代化を開始した。以来150年余、「哲学」の歴史は、そのまま日本の「近代化」の歴史である。

しかし、それが日本で展開する以上、西洋世界に生まれて発展したphilosophyと同じものではありえない。これが、近代日本の哲学を「哲学」として、カッコを付すことの理由である。「哲学」をphilosophyから区別する上でのポイントは、次の二点。

1. philosophyの模倣
2. 独自性の追求

第一点は、「哲学」が成立するための絶対条件。それ以前になかった新しい学問を、一から「まなぶ」わけだから、philosophyを模倣し、それに追随する以外に道はない。日本の研究者は、私も含めて100％、１からスタートする。しかし、1に２が加わるというのは、どうしてか。そこに、前出③の哲学が関係する。「世界と人生の意味についての理性的反省」が、ほぼ同時期（B.C.６～７世紀）に三地域で始まったという事実は、その内容が、「世界」と呼ばれる文明地域ごとに、異なる個性を帯びることを表している。長らくインド・中国の伝統から強い影響を受けてきた日本に、西洋哲学が入ってきたことから生まれた近代日本の「哲学」には、１だけでは済まない２の要素が加わらざるをえない。

上の点をもっとハッキリさせる必要から、私自身の哲学観を披露する。私の考える哲学とは、「自分のテーマを自分で考え、自分の言葉で表現する」というもの。野田による定義「世界と人生の意味についての理性的反省」は、万人に開かれた哲学のあり方を表す。それをさらに、自分なりの表現に変えたものが、Ⓐ自分のテーマを、Ⓑ自分で考え、Ⓒ自分の言葉で表現する、の三点である。この定義を日本に当てはめたなら、当然、上の1だけではなく、2を併せた2点が必要になるだろう。とはいうものの、それは難しい。1に徹すること、そのことだけでもたいへんである。先行業績に新しい成果の上積みが期待される学問研究の王道を、最初からハンディのある後発の日本が歩み、先行する西洋に追いつき追い越すということは、容易ではない。そのうえに、日本「哲学」としての独自性を加えよ、などというのは、いささか苛酷な要求であると言うべきかもしれない。

「近代化」日本は、科学技術と並行して、哲学についても西洋模倣の道をたゆまず歩んできた。その努力は、今日までに相当の蓄積を生んだものの、私としては評価を保留したい考えがある。その理由は、1が2とかみ合うことから生じるべき、「哲学」としての十分な成果が、まだ見られないということである。1に専心する日本人研究者––おそらく全体の95％以上––は、外国人研究者に伍して専門領域に関する業績を上げ、その中には欧米

の学術専門誌にも掲載されるほどの完成度を示すものが、あるかに聞き及ぶ。だがそのほとんどは、世界の主流である①philosophyに追随して実現した成果に過ぎず、「2　独自性の追求」は棚上げされている。私から見れば、②として「それでよし」とは言えない。こういったからとて、1の路線が間違っているとか、1・2の両立が至上命題である、などと強弁するわけではない。人にはそれぞれの持ち前がある。そのうえで、②日本の「哲学」として別の途を拓く可能性があることを、次にお示ししたい。

2　なぜ風土学なのか

「2　独自性の追求」と謳ったものの、そういう言葉で要約できるほど簡単な話ではない。というのは、「1　philosophyの模倣」が絶対不可欠の前提であることに加えて、1・2の結合体である「哲学」の実質は、大半——9割方と言ってもよい——が①のphilosophyから借用したものだからである。「論理」と呼ばれる思考形式、思考内容である「概念」を、philosophyから全面的に借り受けることで、「哲学」の営みが開始された。しかし、かりに90％の実質が西洋哲学に由来するとしても、それだけではない残る10パーセントに、独自性の余地がある。そこに、日本の哲学ならではの立脚地を求めるべきである、というのが私の強調したい論点である。

なぜ、独自性にこだわる必要があるのか。日本人が日本語によって自分の問題を考えること、そのことが、他の世界とは異なる日本の土地で哲学することの基本だからである。そんなことはない、日本人であろうと何国人であろうと、普遍的な論理に従って考えることこそが哲学である、だから日本人の「哲学」などというものはナンセンスだ、とおっしゃる向きがあるかもしれない——現に、私に向けてその種のクレームをつけてこられた大先生もおいでになる。そういう方に、言葉を返したい。あなたが日本で生まれ育った人なら、何語で考えますか、と。答えは、むろん「日本語」。ただし、何語であろうと、論理は一つだから、使用言語などは関係ない、という類の釈明がつくと予想される。それはウソだ、と申し上げたい。普遍妥当的な唯一の論理が存在する、という主張。それがオカシイ、ということではない。しかし、どのように普遍的な論理であろうと、あなたは翻訳などをつうじて日本語で考え理解する以外にない。そういう意味の言語が、「自分で考える」ための基本条件である。考える内容が、ほぼ同じ、「≒」であったとしても、生きる世界ごとに異なるニュアンスを帯びるのが、ふつうである。この確信から、それまでほぼ１オンリーであった私の研究が、大きく2に傾斜し始めたのは、40代、風土学と出会ったころからである。

1の研究に専心しながら、2の意義にうすうす、ないし明確に気づいている人が、世の研究者の大半ではないか、と私は見ている。しかし、それに気づいたとしても、何から手を着ければよいかが判らないまま、ルーティンの研究に縛られているというのが、大方の実情ではないだろうか。私が幸運であったのは、1980年代後半にオギュスタン・ベルク——フランスにおける風土学の立役者——の存在を知り、その仕事が、それまでから関心を抱いていた日本人——西田幾多郎や和辻哲郎——の「哲学」につうじる面があることに気づいたことである。西田や和辻は、西洋哲学の論理・概念に同化しようと努める一方、そこに吸収されない「哲学」としての何かに、独自の表現を与えようと試みた。ベルクは、西洋哲学の中心地フランスの外（＝日本）に身を置くことで、伝統的二元論への違和感に具体的な形を与えた。こうした事実に加えて、偶然にもベルクの知遇を得て、パリに留学する機会が得られたこと（「略歴」参照）、これが重なる幸運であったことは言うまでもない。以下、お話しするのは、私がなぜ風土学に向ったかの一部始終であって、風土学そのものの内容解説ではない——それに関心のある方は、ベルクと私の著書をご覧いただくようお願いしたい。

風土学は、風土の異なりから考えてゆく。「風土」とは、ベルクによれば、「社会の空間と自然に対する関係」である。自分の生きている世界（社会と自然）が、どういうあり方をしているかは、風土ごとに異なる。言語が異なれば当然だが、同じ言語圏でも、地域や個人ごとにさまざまに異なる関係性が成立する、ということが風土学の基本的前提である。風土学的意味での〈差異〉——個人から国家、国際社会に至る多種多様な層で考えられる——を解消して一元化することで、唯一の普遍的な哲学を主張するというのが、①のphilosophy信奉者の立場。それがあることで、はじめてそれとは異なる「哲学」の独自性を主張することが可能になる。つまり、Philosophyあればこその「哲学」。そういう意味において、②は①に代わる選択肢というより、①の方法（論理）や概念をほとんど借用しながら、そこに多少の変更ないし潤色を施す、といった性格のものにならざるをえない。

とそこまで言えば、謙遜を超えて卑下に当たるのでは、という批判が呈されるかもしれない。風土学は、西洋哲学の「ロゴス的論理」に代わる選択肢を、対抗原理としてうちた

てようとするからである――何を隠そう、私自身がその動きを主導してきた。その責任上、②の独自性に関係するこの点に言及しないわけにはゆかない。「ロゴス」のオルタナティヴとして、「レンマ」の論理をうちだしたのは、西田の弟子山内得立である。彼の言う「レンマ的論理」は、西洋形而上学とは異なるインドの大乗仏教に由来し、中国・インドを含めた東洋思想の伝統をしるしづける。西田哲学の継承、およびそれとの〈対決〉から考えつかれたレンマの論理は、西洋哲学全体を支配する二元論とは異質な、「非二元論」を具体化する。

二元論は、Aと非Aの中間、〈あいだ〉を認めない。これに対して、山内が大乗仏教の祖師龍樹から受け継いだとする「中の論理」は、「Aでもなく非Aでもないことによって、Aでも非Aでもある」というあり方を認める。山内は、これが二元論や形式論理の矛盾律・排中律にない発想であることを指摘し、二元論のロゴスを包摂する非二元論によって、「東西論理思想の総合」を実現せんと企てた。私はその主張を受け容れ、山内の驥尾に付しながら歩んできた。拙著（4）（5）（6）（「著書」参照）では、そういう非二元論――〈あいだ〉を開く思考――が、今日の環境危機を打開するための必須条件であるゆえんをお示ししたつもりである。

最後に、「哲学」としての風土学の意義を総括する。私にとって、②「哲学」とは風土学である。ただし、それが、①ｐｈｉｌｏｓｏｐｈｙから一定の距離をとって批判する立場、philosophyに対する〈異議申し立て〉であることは明らかだとしても、それをphilosophyのオルタナティヴとしてではなく、その修正版ないし改訂増補版という規定にとどめることが、妥当ではないかという考えに傾いている。なぜなら、山内得立が西洋の「ロゴス的論理」に対抗するものとして立てた「レンマ的論理」は、その論理形式（テトラレンマ）からして、形式論理のヴァリエーションにほかならず、思考の道具立ても、ロゴス的な概念装置そのものだからである。この事実は、ロゴス的な西洋哲学の土俵に上って勝負する、という根本制約に従うかぎり、避けられない宿命である。山内得立の師、西田幾多郎の「無の論理」にしても、ロゴスという土俵に上って、東洋的・日本的なレンマの〈型〉を演じるという、相当に無理な挑戦の所産であった。哲学の道を進むかぎり、ロゴス的なphilosophyの外に出るとか、それとは異なる別の土俵をつくる、といったことは考えられない。このことが、②「哲学」について、①philosophyへの〈異議申し立て〉という性格を徹底しつつ、後者の修正版ないし増補改訂版の地位にとどめ置く、とすることの理由である。そう断ったうえで、「哲学」に何がどこまで可能なのか、という課題に答えていく責任を、生涯かけてまっとうしたいと考えている。

[略歴]
1951年　奈良県に生まれる。
1970〜1984年　京都大学文学部、同大学院に学ぶ。
1988〜1996年　大阪府立大学総合科学部在職。
1997〜2019年　関西大学文学部在職。
　現在、同名誉教授。
2002〜2003年　フランス国立社会科学高等研究院（EHESS）に留学、オギュスタン・ベルクに師事する。
2012年　急性脳疾患（小脳出血）により、療養急務。翌年、職務復帰。

[著書]（風土学関連）
（1）『風景の論理――沈黙から語りへ』世界思想社、2007年。
（2）『都市の風土学』（編著）ミネルヴァ書房、2009年。
（3）『風土の論理――地理哲学への道』ミネルヴァ書房、2011年。
（4）『〈あいだ〉を開く――レンマの地平』世界思想社、2014年。
（5）『邂逅の論理――〈縁〉の結ぶ世界へ』春秋社、2017年。
（6）『〈出会い〉の風土学――対話へのいざない』幻冬舎、2018年。
（7）『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ――都市の風土学12講』（編著）萌書房、2019年。
（8）『瞬間と刹那――二つのミュトロギー』春秋社、2022年。

[訳書]
・オギュスタン・ベルク『風景という知 ― ― 近代のパラダイムを超えて』世界思想社、2011年。
・オギュスタン・ベルク『風土学はなぜ 何のために』関西大学出版部、2019年。